



♪ チェンバロの日！2015 ♪

日本チェンバロ協会の大イベント「チェンバロの日！」も今年で4回目を迎えチェンバロ関係者にとっては、5月の風物詩となりつつあるのではないのでしょうか。風薫る世田谷で、今年も7台の楽器と共に皆様のお越しをお待ちしております！では、今回のラインナップを簡単に御紹介いたしましょう！

コンサート

チェンバロの魅力には、独りで楽しめるソロ曲の他にも、他の楽器とのアンサンブルがあります。今回予定されている7つのコンサートのうち4つは、アンサンブルのグループが登場します。伴奏という領域を遙かに越えた、構築力のある共演をお楽しみいただけたと思います。もちろん、求心力に溢れたチェンバロソロも充実しております。

メンテナンス講座、調律講座

「ツメが折れちゃったけど…」「音痴なチェンバロで弾きたくない…」チェンバロを所有されている方にとって、時々頭を悩ます楽器の問題。そうした方々にもメンテナンスと調律の講座が準備されています。そして、こうした技術を身につけることによって楽器との距離も縮まり、演奏する時にも大きな滋養になってくれるはずです。

特別講座

日本の古楽黎明期から活躍され、2013年10月に亡くなられた柴田雄康(しばた・たかやす)氏。チェンバロ製作だけでなく、リコーダー奏者としても国際的に高い評価を得て活躍されていた故人を偲んで、日本の古楽を築いてきた仲間によるレクチャーとコンサートが開催されます。柴田氏の遺されたチェンバロも展示されます。

通奏低音の初歩

通奏低音って、聴いたことはあるけれどなんだか難しそう…。楽譜に書いてある数字を読むなんてちょっと無理…。そんなふうに躊躇している方にオススメです。食わず嫌いな日常にちょっとだけ勇気を出して一口かじってみれば、そこから広がるあなただけの響きの世界！もうひとつの音楽の入口はこんなところにありました！

ミニチュアチェンバロを作ろう

ピアノの小物ならいろいろな雑貨屋で見かけるのだけれど、チェンバロの小物はなかなか見当たらないものですね。手の平に乗るチェンバロのミニチュアをご自身の手で作ってみるのはいかがですか？世界でひとつだけの、自分だけのミニチェンバロを作りながら、楽器の構造まで学べてしまう、ワクワク体験が待っています。

楽器紹介

今回展示されている7台のチェンバロを1台ずつ解説しながら回る楽器ガイドツアー。それぞれの楽器の歴史的背景などを紹介しながらその楽器にふさわしい演奏も聴ける小さな欧州旅行は、イタリア、フランドル、フランス、ドイツを巡ります。それぞれの楽器にどんな違いと魅力があるかは、あなたの耳で確かめてみて下さいね。

展示販売

探している物や、望んでいる物は、インターネットで簡単に購入できる便利な時代です。しかし、そこに未知の音楽との接点はありません。類希なCDや楽譜が充実している物販コーナーで、ゆっくりと手にとって眺めてみてください。その他、運営委員の手造りによるチェンバロをモチーフとしたブローチやレターセット等のグッズも、会場限定で販売します。

それから

チェンバロ愛好家によるフリーコンサートも開催されます。日頃の練習の成果を、楽しみに聴かせていただきますよう！

会場にはチェンバロ製作家も常駐しております。これから楽器の購入をお考えの方や、楽器のメンテナンス等にお悩みの方は、気軽に声をかけてみてください。

弦楽器や管楽器の方々は、アンサンブルなどを通して互いに交流する機会があるようですが、鍵盤楽器奏者はなかなかそういった機会に恵まれません。こうしたイベントを楽しんでいただくと同時に、チェンバロを愛する仲間達と知り合って友好の輪を広げるきっかけになりますように！

9日18時半からの懇親会にも是非お越しください！

最後に

同じ会費を納めているにも関わらず、遠方にお住まいであったり、多忙であるがためにイベントに参加できない会員の方々に、どうすれば喜んでいただけるだろうか、という思いが、私ども運営委員の心の中にいつもございます。そうした方にも楽しんでいただけるよう、多少の時差は生じてしまいますが、今後もイベント動画の配信や、HP上での迅速なレポートを行って参ります。

🎹 会計より皆様へ「更新手続きのご案内」 🎹

平素は日本チェンバロ協会の活動へご理解とご協力を賜り、誠に有り難うございます。
お手数ですが、2015年度（4月1日から翌3月31日）年会費を下記口座までお振込みいただきますようお願い申し上げます。
お振込が確認でき次第、新しい会員証を事務局より送付いたします。

〔年会費〕 正会員／6000円 正会員（学生）／3000円
一般会員／3000円 法人・団体会員／10000円

また、今後の催しやHPの充実など、より良い活動の実現のために、随時賛助金を受け付けております。

〔賛助金〕 正会員・学生会員／一口3000円より
法人・団体会員／一口10000円より

〈お振込先〉 ゆうちょ銀行

名義：日本チェンバロ協会 店名：〇〇八（ゼロゼロハチ）
店番：008 預金種目：普通預金 口座番号：0724661

なお、5月9,10日に開催いたします「チェンバロの日！2015」の会場でも更新手続きが可能です。あわせて是非ご利用下さい。
また、退会される場合は、事務局までその旨ご一報下さい。

❦ 下半期の報告 ❦

第11回例会報告 山形・仙台例会「東北のチェンバロと仲間たち」

渡邊温子（わたなべあつこ・運営委員）

2014年12月6日（土）7日（日）の2日間、日本チェンバロ協会初の東北地方での例会が行われました。
6日は山形、7日は仙台で、東京外の例会としては大阪・名古屋に次ぐ3回目となりました。

12月6日（土）山形

会場は、イタリア食材カフェ「ピウ・ポーノ」。

15:30～18:15の間に、梅津樹子氏による1人15分のワンポイントレッスンと、楽器製作者の木村雅雄氏によるトーク「チェンバロの調律ってどうするの？」が行われ、来場者のためのチェンバロ自由試奏タイムも設けられました。

19:00からは、大石祥之氏によるイタリア音楽にフォーカスしたコンサートが行われました。

〔大石祥之氏〕

2002年から2006年までイタリアのミラノ市立音楽院古楽科とローディ市立音楽院で学ばれ、現在、仙台青葉学院短期大学で講師をしていらっしゃいます。

〔演奏曲〕

フレスコバルディ：トッカータ第7番（第2巻より）
トラバーチ：Ancidetermi pur Per l' Arpa (d' Archadelt passaggiato)
D.スカルラッティ：ソナタK.12, K.13
J.S.バッハ：イタリア協奏曲

〔使用楽器〕

木村雅雄氏 2001年製作 フレミッシュ・フレンチ
（モデル：クーシェ1680 - プランシェ1758 - タスカン1781）

===来場者の感想===

当日はあいにくの雪となりましたが、会場には多くの方々が来場されました。ミニレッスンや試奏タイムでは、チェンバロに初めて触れる方もおり、最初は戸惑っている様子でしたが、次第に慣れてきて皆様楽しそうでした。

コンサートでは、様々な作曲家の曲を聴くことができ、また演奏者の方々の愛着もひしひしと伝わるアットホームな雰囲気になりました。

普段触れることの少ないチェンバロという楽器を、この山形で身近に感じることができ、とても貴重な体験をすることができました。（遠山元気）



12月7日(日) 仙台

N-ovalビル1Fの中の2会場で行われました。

13:30~15:30 の間に、製作者の林裕希氏と木村雅雄氏による楽器紹介と、岩成玲子氏と大石祥之氏による1人15分のワンポイントレッスンが行われ、来場者のための楽器自由試奏タイムも設けられました。

15:30 からは梅津樹子氏によるトークコンサート「バッハへの道のり」が行われました。

[梅津樹子氏]

1994年から96年にフランス国立パリ地方音楽院に学ばれ、栄誉賞付きディプロムを得て卒業されています。

[演奏曲]

L.クーラン：プレリユード／シャコンヌ（ヘ長調）
フローベルガー：「フェルディナンド4世の悲しき死に捧げる哀歌」を含む組曲

J.S.バッハ：プレリユードとフーガ BWV881

[使用楽器]

ハヤシチェンバロ製作所 2014年製作
フレミッシュ・ラヴァルマン・ルッカーズモデル

＝＝＝＝＝来場者の感想＝＝＝＝＝

仙台にて～東北のチェンバロ仲間たち～に参加するため、当日会場に向かった際、建物の窓からちらりと見えたチェンバロがあまりに素敵で少々興奮気味になりました。

会場に入ると美しい装飾のチェンバロが2台、圧倒的存在感で置かれていて、レッスンされていたチェンバロの音が聞こえたのが印象的です。

16:00~17:00 までは、再びワンポイントレッスンと試奏タイムが設けられ、17時からは岩成玲子氏によるトークコンサート「ヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロで奏でるフランス宮廷音楽」が行われました（ヴィオラ・ダ・ガンバは田中孝子氏）。

[岩成玲子氏]

2005年よりフランスのアンジェ音楽院、2008年よりカナダのモントリオールの McGill 大学音楽学部古楽器科で学ばれています。

[演奏曲]

マレ：ヴィオール曲集第3巻 組曲イ短調より
プレリユード、グラン・バレ
ラモー：ロンド形式によるミュゼット、優しい訴え
マレ：ヴィオール曲集第2巻よりスペインのフォリア（抜粋）

[使用楽器]

木村雅雄氏 2009年製作 フレンチ チェンバロ
（モデル：H.エムシュ、パリ 1756）

そして参加者の多さに驚きました。仙台にはチェンバロに関心を持たれている方が多いことを知り嬉しくなりました。製作者の方の説明や、チェンバロに直に触れ音を出せる環境は、時代の音を感じられる貴重な体験であり大きな喜びでした。チェンバロの美しい響きを耳に残し、また、このような機会を設けていただきたいと思います。（三浦美香）

なお、東日本大震災から4年。この例会の実現にあたっては、震災の時に丁度山形から仙台に向かっていらしたという栗形亜樹子氏の多大なご助力があったということも、一言付け加えさせていただきます。

また、林裕希氏から頂いたメッセージ「願わくばこの例会が会員、愛好家の皆様の参考に資するのみならず、東北の全ての方の『心の復興』の一助となりますように。」ここに込められた思いが実現されたのであれば、これほど喜ばしいことはありません。



(撮影：今田亨氏)

第12回例会報告① ジョセフ・ガシヨー氏 リサイタル

岩本真紀（いわもとまき・一般）

1月10日(土)のジョセフ・ガシヨー氏のリサイタルとワークショップに参加させて頂きました。

会場の古楽研究会 Space1Fはとてもシンプルで小さなホールですが、天井は高め、壁も柔らかいピンクベージュ色の居心地の良い空間で、チェンバロ演奏にはぴったりな感じがしました。そこに3台のチェンバロが設置されていました。正面手前

に一段鍵盤のイタリアン（シュツェ作フェリーニモデル）。正面奥に2段鍵盤の屋根板の内側の絵が美しいフレミッシュ（カルマン作ルッカーズモデル）。右の壁際に水色緑のフレミッシュタイプのチェンバロ（スコヴロネック作ドゥルケンモデル）が設置されていました。そしてそれぞれ調律法も変えられていました（1/4 ミーントーン、1/6 ミーントーン、平均律）。

複数の楽器を一度の演奏会で使用するなんて、多くのコレクションをお持ちのこの会場ならではないでしょうか。

演奏プログラムもほぼ年代の古い順に、古楽で有名な作曲家で、その中でも技巧的な曲が多く弾かれました。特に私が印象に残ったのはガショー氏自ら編曲の『バッハ 無伴奏チェロ組曲』でした。実は最初からチェンバロの為の曲ではなからうか、という位の曲になっており、素晴らしい和声で奏でられています。チェロの旋律からバッハが奏でたかった和声を想像する、というガショー氏の言葉は印象的でした。

私は全体的にとっても贅沢なプログラムだと思いました。3台のチェンバロを使い、幅広く無限の音色を聴くことができたように思いました。また古楽にこだわらず、間に武満徹の現代音楽曲を入れてくるというのは私にとっては驚きでした。

演奏者のガショー氏は、力強く濃密な音色、時には情景を思い起こさせる様な繊細な音色（クープランの『波』や武満徹の『夢見る雨』）と、あらゆる音色を奏で出していました。また、3台のチェンバロの向きがそれぞれ違っていたので、その内の一台は演奏者の手がよく見えました。極めて正確で、そして繊細なチェンバロのタッチをはっきり見ることができたこ

とは、とても良い経験となりました。このようなチェンバロの、様々な美しい音色を聴くことができた事は、私にとって新たな発見で、本当に素晴らしいリサイタルでした。

最後に、アメリカからガショー氏を招聘して、この演奏会を企画して下さった渡邊温子さん、本当にお疲れ様でした。素晴らしい演奏会をありがとうございました。

〔演奏曲〕

フレスコバルティ：トッカータ第7番（第2巻より）

J.S.バッハ／ガショー編曲：無伴奏チェロ組曲第1番

D.スカルラッティ：ソナタ K.213, K.119

C.P.E.バッハ：ソナタハ短調 Wq.48/4

F.クープラン：プレリュード第5番（クラヴサン奏法より）

ロジヴィエール・アルマンド、波

武満徹：夢見る雨

ラモー：プレリュード（クラヴサン曲集第1集より）

ガヴォットと6つのドゥーブル（新クラヴサン組曲集より）

マッテイス／ガショー編曲：ヴァイオリンと通奏低音のためのプレリュード、チャッコーナ

第12回例会報告② ガショー氏のワークショップ

坂由理（ばんゆり・正会員）

すでに夕刻、寒気が身にしみる頃だったが、ワークショップの会場はコンサートの興奮がさめぬまま、熱い空気に包まれていた。レクチャーはパッヘルベル「アリア第5番」（Hexachordum Apollinis）の「解剖」に始まった。

「解剖 anatomy」とはガショー氏自身の言葉である。音楽用語としては「分析」というのが普通だろうが、音楽は人間と同じく生々しいもの、そう呼んで不思議はない。

まず、バス声部ラ ソ# ラ ミ | ファ ソ ドにもとづく和声の骨格を示し、どんどん単純化していく。究極の reduction は、1小節目がラドミの和音、次の小節はドの音のみ。解剖したら、おやまあ、アバラ骨2本だけだった、ということか。なんと大胆な分析、いや解剖！と驚いたが、数日後にハタと気がついた。レクチャー後半で取り上げたラモーの「ガヴォット」、この曲の骨格もやはりラドミとド（ミソ）なのである。もちろん途中の道筋は違う。ラモーはミ ソ# シの和音によって、大きくカーヴを曲がるのだが、（パッヘルベルはミソシ）大胆に切りさばれば、パッヘルベルと同じアバラ骨がゴロンゴロン。はーん、ガショー先生、ミシガンではこれを使って白熱教室でございませうか。同じイ短調だし——。旋法から調性へという音楽史の移り変わりをこの2曲で語ることができませうね。そのとき気がつけば一言お尋ねしたものを——、と後で深く深くホゾを噛みました。いや、後悔しても仕方がない。3人の受講生のレッスンも十分に興味深く、充実したものだったのだから、悔やむのはやめよう。

フレスコバルティ「カンツォーナ第3番」（トッカータ集第2巻）（西山如香さん）のレッスンでは、「弦楽器のポウイングと同じだよ」と言うそばから、チェンバロの突き上げ棒を弓に見立てて実践。弓にしてはえらく長かったが、西山さんにとっても聴衆にとっても得心の笑みがこぼれる瞬間だった。スカル

ラッティ「ソナタ K.208」（入手春香さん）は、「僕の話の意図にピッタリの曲」と説明にも熱がこもった。レッスンでの選曲は、とても大事、とあらためて思う。最後は「イギリス組曲第2番」プレリュード（安田敬郁子さん）。全曲通ず時間がなかったのは残念だったが、ガショー氏、急所は逃さず、ややこしいパッセージを何通りかの指使いで弾いてみせた。そして、どれを選ぶかは奏者自身とし、先生のコピーを作るのがレッスンの目的でないことを言外に示した。お三方とも、氏のアドヴァイスを的確にとらえ、即座に反応していたが、それには、受講生の立場に寄り添った通訳（渡邊温子さん）の力も大きかったと思う。

最後に付け加えておきたいのは、この日、寒さにもめげず大勢の聴講の方々が集まり、しかも小学生とおぼしき子供たちが熱心に聴き入っていたこと。このワークショップによって、彼らの心にはチェンバロ音楽の魅力と奥深さがしっかりと刻まれたに違いない。



第 13 回例会報告「フリーコンサート」

渡邊温子（わたなべあつこ・運営委員）

2015年2月8日（日）14時より、東京都世田谷区の松本記念音楽迎賓館Bホールにて、フリーコンサートが行われました。5組の演奏者が約20分ずつ、途中10分の休憩を挟んで演奏を披露し、21名の来場者がその熱演に聴き入りました。

出演者と演奏曲目は以下の通りです。（敬称略）

1. 安田 敬郁子（共演：Re.徳重ゆり、Ft.清野由紀子）
J.S.バッハ：プレリュード（イギリス組曲第2番より）
J.J.クヴァンツ：リコーダー、フルートと通奏低音のためのソナタ 八長調
2. 松永 紗也加
G. ベーム：組曲ハ長調
J. S. バッハ：平均律クラヴィア曲集第1巻より
プレリュードとフーガ 嬰ハ短調
J. S. バッハ：平均律クラヴィア曲集第2巻より
プレリュードとフーガ ハ長調
D. スカルラッティ：ソナタ 二短調 K.14
ソナタ イ長調 K.113
3. 川上 模二郎
W.バード：ローランド
J. -Ph.ラモー：クラヴサン曲集よりヴィラジョワーズ（田舎風）
J. S. バッハ：平均律クラヴィア曲集 第1巻より
プレリュードとフーガ 二短調
D. スカルラッティ：ソナタ ホ長調 K.216
4. 小久保 美希
J. S. バッハ：平均律クラヴィア曲集 第1巻より
プレリュードとフーガ 嬰ハ短調
D. スカルラッティ：ソナタ イ長調 K.113
ソナタ 二短調 K.141
G. ベーム：組曲ハ長調
5. 山下 実季奈
J.S.バッハ：平均律クラヴィア曲集 第2巻より
プレリュードとフーガ 二短調
トッカータ ハ短調

終了後、栗形亜樹子氏による全体講評があり、「人前で演奏するということはどういうことか」という演奏の本質的な部分を丁寧に噛み砕いたお話をしてくださいました。その後演奏者は個別に栗形氏から講評を受け、また協会運営委員の副嶋恭子氏と渡邊温子も個別の講評に応じました。

==== 来場者の感想 ====

5人の方の演奏を聴かせていただきましたがお一人お一人の表現したい音楽がチェンバロの音から空間を通してとてもよく伝わってくる演奏でした。全体の時間としてはちょうど良かったのですが、もう少し人数が増えると楽しいかなという印象を受けました。お客さんに自分の出した音がどのように伝わるのか、弾くことに一生懸命だった私にとって大変勉強になりました。ありがとうございました。（後藤早恵 学生会員）



☕ 談話室 「たかが珈琲、されど珈琲」 ☕

岡田龍之介（おかだりゅうのすけ・運営委員）

会報に、音楽とは直接関係のない話題を扱うコーナーがあっても良いのでは？という提案が運営委員の中からはなされ、それでは取りあえず一度試して？みよう、ということになりました。第一回は私の好物、珈琲の話題で。

珈琲も音楽同様、人により店により様々な味わいを楽しめます。豆の種類、ブレンドの仕方、湯温、蒸らしの時間等が複雑に絡み合い、その味わいは千変万化、なかなか奥深い世界では

ないかと思います。私自身は苦味の効いた珈琲が好きですが、最近は浅煎りの豆を使ったさっぱりとした味わいのもも楽しんでます。

演奏に行く先々でお気に入りの珈琲屋さんを見つけるのが趣味のひとつになってはいますが、都内にもよく足を運ぶ店が三軒ほどありました。不思議なもので、それらの店は味に魅かれて通うようになったのですが、実は味だけでなく、店の雰囲気、

カップ、さらにはマスターの人柄まで私の好みであることに気が付き、驚いた次第です。

私の住まいから一番近いのは池袋の珈琲茶房という店で、食器からスイーツに至るまで店主の並々ならぬこだわりが感じられ、それでいて窮屈な居心地の悪さを感じることは皆無、白髪がとて魅力的なマスターと言葉を交わしたことは一度もないのですが、職人風な厳しさと人をもてなす温かさとは珈琲を通じて伝わってくるようで、私は一種の達人、とその人柄に密かに畏敬の念を抱いていました。

二つ目はある方から紹介された駒込のクラナッハ。六義園に隣接する静かな市街地に佇む珈琲店で、この店に通じる六義園沿いの石の歩道に何とも言えぬ風情があり、私の恰好の散歩道でした。マスターは音楽を愛する心優しい穏やかな方ですが、焙煎機に張り付いている時の表情は真剣そのもの、コクのある深い味わいながらキレの良いスッキリとした後味はさながらマスターの謙虚で研究熱心な姿勢が凝縮されているようで、一口含むと得も言われぬ幸福な気分になります。

最後は大久保駅改札口真向かいの亜麻亭。私がよく演奏会場に使う淀橋教会のすぐ近くにあり、演奏会の前にここで一服するのが常でした。チェーン店で池袋や新宿にも同名の店舗がありますが、店が広くゆったりとしており、豊かな気分になれる

という点でここは格別でした。この店で一番驚いたのは上記二店とは異なり、サイフォンで珈琲を提供している点でした。それまで何回かサイフォンによる珈琲を飲んでいた私ですがどうしてもその味に馴染めず、ドリップ式に及ばない、と思いついていました。この店もてっきりドリップ式だと思っていたのですが、ある時勘定の際ふと厨房に目を遣ると、サイフォンで淹れているではありませんか！風味豊かなバランスの取れたその味は、ドリップに比べて何の遜色もなく、私のサイフォンに対する偏見を打破する画期的なものでした。

どうです、皆さん行ってみたいくなりましたか？でもご免なさい、三軒とも今は閉店してしまいました！皆さん期待させておいて、と叱られそうですが、至福の一杯を味わわせてくれたこれらの店のことを是非書き留めておきたい、批判は覚悟の上で一種のオマージュとして記させて頂きました。チェーン店の機械式抽出による珈琲店がブームとなり、本格的な珈琲を提供する店がどんどん少なくなっていくことに何とも言えぬ淋しさと危惧を感じる今日この頃ですが、珈琲の真の美味しさを教えてくれたこれらの店に深く感謝すると同時に、音楽同様これも貴重な文化のひとつとしてその価値を伝えていかなければいけないのでは？という考えがふと頭を過った次第です。

🔊 例会募集のお知らせ

日本チェンバロ協会では、主催行事である例会を公募します。

チェンバロや、チェンバロが使われていた時代の音楽について、どのような方向からアプローチしていきたいかは、個人個人で異なると思います。各々がそのアイデアを持ち寄って共有したら、より広がりをもったイベントを開催できるのではないかと・・・

そうした思いから、日本チェンバロ協会では、主催行事である例会を公募することに致しました。特に東京外では、ご自身が学びたい事や方法にたどり着ける機会が、より少ないかもしれません。「こういう会を催したい」「こういう会があったら良いのに」そういう方こそ、そのアイデアを反映させてみませんか。皆さんの手で、自分の学びたい方法で学べる場を作ってみませんか。

- ・開催時期、会場、内容など、具体的であればあるほど実現性が高まりますが、アイデアだけでも構いません。
- ・応募いただいたもの全てが採用されるわけではありません。
- ・詳細や応募先は、日本チェンバロ協会例会係へお願いします。

どうぞ、お気軽にご相談下さい。沢山のご応募をお待ちしております。 例会係: cembalo_events@yahoo.co.jp

🔊 広報も筆の誤り

外国から新しい文化が入ってくると、同時に新しい言葉も入ってきます。

広報委員にとって、外来語の表記や翻訳された名称などは、校正する時にとて気を使う作業になっています。

輸入された言葉は、様々な形態に変様するのですが、時々不思議な現象も生じているようです。

●同じスペルなのに、異なったカタカナになるモノがあります。チェンバロのジャック(Jack)は、車を持ち上げる“ジャッキ”と同じですし、タンク(Tongue)は、仙台名物の牛タンの“タン”と同じ言葉です。

●思い切って新しい日本語を作ってしまったものもあります。交響曲や協奏曲などは、すっかり定着しています。しかし、小夜曲と夜想曲の違いは微妙ですし、譚詩曲と諧謔曲にいたっては読むことすら容易ではありません。

●翻訳されたものは、更にいろいろな問題が生じるようです。いっそ翻訳しない方がよかったと思わせる代表は、モーツァルトの「俺の尻をなめろ」でしょう。誤訳といえば、バッハの「平均律クラヴィア曲集」の“平均律”が挙げられるでしょう。

しかし最も残念な誤訳は、なんとといっても「ヨハネ受難曲(Johannes-Passion)」かも知れません。ある小説の中で、この曲は次のように紹介されていたそうです... バック作曲「ジョンの情熱」



日本チェンバロ協会
Japan Harpsichord Society

会報第4号 2015年4月15日発行 発行人：小林道夫
編集：及川れいね、加屋野木山、高橋ナツコ、廣澤麻美、山縣万里
運営委員会：大塚直哉

日本チェンバロ協会事務局
住所：〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1丁目44-4 1階
電話：080-9661-8196（火曜日 10時～17時に対応）
メール：japan.harpsichord.society@gmail.com
ホームページ：<http://japanharpsichordsociety.jimdo.com>